

教職大学院

Newsletter

No.129

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2020.2.10

エジプト・日本教育パートナーシップ(EJEP)による 第3回 教員研修がはじまりました

福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科(連合教職大学院)は、エジプトの現職教員らを受入れて研修を行う、エジプト・日本教育パートナーシップ人材育成事業(EJEP-HRDP)におけるグループ研修プログラムの第3陣40名を、1月20日から2月14日まで本学などで受け入れます。

1月20日には文京キャンパスで開講式が行われ、駐日エジプト大使館文化教育科学局のDr. Hany A El-Shemy 参事官と本学の上田孝典学長、連合教職大学院教員らが出席しました。上田学長は挨拶の中で産業や社会構造が大きく変化するのに伴い教育が大きく変化しようとしている現代において、何をどう変えなければならないか、その手ごかりは幼児教育と日本の特別活動にあると述べて、研修員の方の学びを教職大学院のスタッフは全力で支えていくことを伝えました。

今回は研修員として、今回はエジプト側のプロジェクト事務局スタッフとして同行した Ms. Aza Mahmoud Hafez Elsergany 氏が、「学ぶ環境を作っていたいただいた福井大学とエジプト大使館に感謝します」との謝辞に続いて、研修員に向け「エジプトの将来を担う子どもたちのために日本の現場を見て学んだことを持ち帰り、それぞれの学校で活かしてほしい」と激励しました。

開講式後、松木健一理事(企画戦略担当)/副学長が研修内容などを説明しました。

研修は福井大学二の宮キャンパスを拠点に行われています。福井大学教育学部附属義務教育学校や附属幼稚園、福井市内の公立小学校の他、京都や長野県の公立小学校など具体的な実践の場を参観するこ

と、実践事例を読み合うこと、実践を支える理論について学ぶこと、それらを通したお互いの学びを共有するセッションを組み込んだ本学連合教職大学院の学びの形で進められています。

(<https://www.u-fukui.ac.jp/news/54217/> より抜粋・一部付け加えて編集しました)



内容

- 「エジプト・日本教育パートナーシップ」研修
- スタートのお知らせ (1)
- 月間カンファレンス・冬期集中講座に参加して (2)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (5)
- ミドルリーダー/マネジメントコース便り (7)
- 各地ラウンドテーブル参加報告(その2) (9)
- 実践研究福井ラウンドテーブル 案内 (14)
- スケジュール (20)



月間カンファレンス・冬期集中講座に参加して

10月の合同カンファレンスに参加して

ミドルリーダー養成コース2年／認定こども園 福井佼幼稚園 松田 知峰

10月の合同カンファレンスは、「新しい世代を支え学び合う」というテーマが取り上げられ、まず美浜中学校の織田先生からの実践報告があった。教員数の半数が20代～30代前半という環境のもと、若い世代を育てる中で、働きやすい職場を目指して、さらには子どもたちに反映できるように…と、先生方の取り組みや協働の様子を聞くことができた。私自身、多くの若手とともに子どもたちに関わり、育ちや学びを見取る毎日。エネルギー溢る若手から力をもらい、一緒に成長していくためには、自分のもとより職場全体の意識改革が必要であることを改めて考える機会となった。

美浜中学校での重点的な取り組みの一つとして、教科部会の枠を越えて作られた研究グループでの取り組みがある。あえて他教科担当同士でグループを組み、授業を見合うというものだが、他教科からの視点で、どのような資質能力が育っているのか等、子どもの学びの姿を見取ることで、自分自身の教科

の研究や授業にも生かすことができているとのこと。その中で、学習内容の理解においては、スタート時点で「この単元で何を学ぶのか」という課題を立て、ゴールイメージを教員・子ども間で共有する姿を目指し、生徒とともにねらいに向かっていくという実践を聞き、校種は違うけれども、共感できるものがあつた。

我が園でも、日頃から「どのようにしたら全職員が全園児の成長を共有できるか」という課題を抱えて試行錯誤している。そこで、昨年度より園内研修の一つとして『担任シャッフル』に挑戦している。保育の業務上、学校のように複数の職員で一人の保育を見合う時間をつくりだすことは難しいので、保育者が学年を越えて他クラスの担任として半日間保育を受けもつ研修である。これは、園の保育体制として、全クラスに保育者が2人配置されていることから実現した。実際に他学年を受けもつことで、それぞれの雰囲気や担任との関係性を垣間見たり、子どもたちに

直にふれることで、生活面の育ちや学びをみとることができ、自分の保育を振り返るきっかけとなっている。特に若手のクラスからは、自分が忘れかけていた、一人ひとりに丁寧に向き合う大切さ、クラスづくりへの展望、保護者への細やかな配慮など多くのことを学ぶことができている。私自身のその学びを若手たちに伝え、共有しつつけていくことで、どんな研修会に出かけるよりも大きな学びにつながり、自分

たちの取り組みへの自信、保育者全員で全園児を見守っていこうという意欲に変わっていることを実感している。園独自の実践の積み重ねではあるが、何より子ども達の心や発達に理解を寄せ、“どのような力を育てようとしているか”というねらいを揺るがすことなく、今後も保育者全員で支え合って学び続けていきたいと思う。

冬季サイクル(長期実践報告作成)の学び

ミドルリーダー養成コース2年／「楽しい学校・教員コンサルタント Second」事業主
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 カリキュラムアドバイザー

前田 健志

長期実践報告作成の学びを短く語るなど、今までで一番難しい。学びが多すぎる。したがって、かなりの絞って、述べていきたい。

「学ぶ楽しさ」を教員になってからいつも大事にし、考え実践してきたはずだった。しかし、大事にしてきたはずなのだが、この長期実践報告を書くにあたって、楽しくない学びの時間が続いた。構成を考えすぎて、書きたいことが書けない。書いていると何かよくわからない新しい自分や価値観・思考に出会うはずが、出会わない。「期限までに書きたいことがかけるだろうか」「うまくかけるだろうか」そんなことばかりが、頭をよぎる。

2019年12月26日14:00頃、ファシリテーターの富永先生が硬い表情の僕を呼び止めてくださった。そして長期実践報告の悩みを富永先生にぶつけた。次のような言葉が返ってきた。「楽しんで学んでますか？この長期実践報告って学びじゃないの？いつも先生が大切にしていることだし、毎回仕事で他の先生に言っていることでしょ」

なんと自分は愚かな人間なのだと再認識した。今まで一番大事にしてきたことを、今の「楽しい学校コンサルタント Second」の仕事の最も根源的なものを、自分自身が忘れてしまっているとは。猛反省した。

続けて「読みたい長期実践報告ってどんなもの？」と聞かれ、以下の3点を答えた。

- ①「人間くさく、もがきがよく描写されつつも、前へ進もうという意思を感じるもの」
- ②「自分の想定範囲外に及ぶもの」
- ③「自分だったらこうするし、いまからカスタムしてみよう、と思えるもの」

自分の回答に対し、富永さんは「じゃあ人間臭くマエケンさんらしく書けば。みんなそれが読みたいんじゃない？マエケンさんが思うようかけば人間臭いし、想定範囲を超えるし、自分だったらこうするって読み手は思うんじゃない？」

霧が晴れた！今までもこれからも変わらない自分の大事なモットー「楽しく学び」ながら書くことを堅く決意した。正直な心の揺れ、悩み、今までに表に出さなかった感情に新たな価値づけをしたい。表に出さなかったり、選ばなかった思考にこそ、人間くささが眠っている。それは他人にとっても想定範囲外に及ぶものもあろう。自分だったらこう考えるな、と考える材料にもなろう。

今「再発見」したことを一つ挙げておきたい。私「前田健志」は「〇〇しなければならない」を強く意識しすぎると、大切にしていることを忘れてしまう傾向になるということだ。もちろん「〇〇しなければならない」という状況は、たくさんあるし避けては通れないことも多い。ただ、その中でも、「どうしたら楽しめるか」「楽しさを創造(価値創造)」していくことは

必ずできるし、大事にしてきた。しかし、今回大事にできずに、富永先生によって自分の大事にしているものに気づかせてもらった。「〇〇しなければいけない」ということにこれから出会う際、「どうしたらしなければならぬことをできるか？」と同時に「その方法は自分にとって学び多き楽しめる方法か？」という問いを立てなければならぬと強く感じた。この長期実践報告作成で得た、最も HOT な学びなので、記しておきたい。

自分にこんなにも真剣に長時間向き合ったことは、いまだかつてなかった。日々、いろんな実践や思考を繰り返して、そのジャンルは多岐にわたる。そもそも教員の仕事のジャンルは多岐にわたるものだが、学校の枠を超えて活動してきたので、一見、つながりがなさそうだったり、バラバラだったりする。しかしどの実践や思考も、すべて「前田健志」という人間のものであり、いくつかの自分の軸で貫かれている。軸は時間とともに形を変容させているかもしれないが、繋がりそのものが失われることはない。「ブロックチェーンの安全性も繋がりで担保されている。最も重要なこの繋がりを言語化していくこと、これが省察であり、長期的な成長に欠かせないものなのではないだろうか。その時に大事にしたいのが、自分の心や思考の揺れ、闇の部分、苦勞、選ばなかった選択肢だ。つまり、その時の感情、思考に正直に寄り添うことを長期実践報告では大切にしようとした。

しかしそんなにスムーズにはいかない。「なんでこんな書かなあかんねん？」「書いてどうなんねん？」

「実践ってどこまでが実践やねん？」「長期実践報告って自叙伝とどう違うねん？」「どこまで自分のプライベートかかなあかんねん？」「どんな構成が他の人にとって読んで価値あるものになんねん？」不満にも似た問いに溢れたスタートだった。書く意味も理屈ではわかっている。ただ、自分の中で、じっくりきいていなかったのだ。“問い”は私を迷せたが、前へも進めてくれた。「自分にとって一番大事な実践とは？」という問いで、「楽しい学校コンサルタント Second」の実践を本著の中心に据えることができた。

書き進め、見返すたび、「あかん、また虚栄心でしてしまってるやん」「ほんまどんだけ自慢したいねん」など、自分の弱さが執筆中、至るところで現れたが、逃げずに自分の弱さと向き合ってきた。弱い自分と向き合うのは、本当にしんどかった。しかし、徐々に自分にとって大切にしているものや大切にしていきたいものがはっきり見えてきた。書いて、読み直して、書き直して、読み直して、書き直して、を繰り返しているうちに、本当に色んなものがみえてきて、楽しくなってきた。この長期実践報告を書き始めてから、書き終わるまでの、自分の中の変化を楽しむようになっていた。筆を止めるのが惜しまれるくらい「まだまだ書きたい」と思うようになっていた。もっと色んな自分を知りたい。

最後に、この学びは、愛する家族、生徒たち、先生方、地域の方々の支えなしには、経験することはできませんでした。本当にありがとうございます。これからもよろしく願いいたします。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

“分からない”ことが増えていく！？

授業研究・教職専門性開発コース1年／福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

村林 雅也

暖冬とは言いつつも冬の寒さが本番を迎え、毎年恒例となっているインフルエンザが流行する時期がやって来た。『出席停止』、『学級閉鎖』なんていう少し残念な言葉もちらほら聞こえてくる中、自分はいつ感染してしまうんだろう？そんな恐怖に怯えながら本稿を執筆している。

冬が訪れたということは、教職大学院に入学して1年を迎えようとしていることになる。月日が経つのは早いものである。さかのぼること約1年前。とある教職大学院の先輩が自己紹介で『教職大学院に入学してから、分からないことが増えました。』とお話しされていた。ストレートマスターの先輩方との顔合わせのときだったのだろうか。それとも初めての月間合同カンファレンスのときだったのだろうか。これとは別の機会だったのだろうか。いつお聞きしたお話だったのか、残念ながら忘れてしまった。そしてさらに申し訳ないことに、何方のお話であったかすら忘れてしまった。しかしそのときの私が、どうして勉強するのに分からないことが増えるのだろうか？そんなはずはないだろう。と考えて疑問に思ったことだけはよく記憶している。

現在は福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程にインターンシップとして入らせていただき、先生方にご指導いただきながら子どもたちと学校生活を共にしている。多くの先生方の授業を参観させていただき、教育実践研究会では附属義務教育学校の研究の場を見せていただきながら学校とは何か、授業とはどんなものなのか学んでいる。しかし『学び合う授業』とは何か、そもそも『主体的・対話的で深い学び』が実現される授業とはどのようなものか、授業を参観する回数が増えれば増えるほど考える事柄が多くなり、分からなくなっていく感覚を抱いている。また、ときには授業を実践する機会をいただきながら授業の技を学んだり、授業とはどうあるべきか考えたりする機会があるのだが、これもまた授業実践を重ねるごとに、以前にはなかった新たな課題が生まれるし、その課題を解決する手立てが分からなく

なる。学校生活における子どもの姿を見取り、継続的に子どもの成長を追ってみようという目標をもって子どもの様子を観察することもあるが、これに至っては自分の見取りが正しいのか、どのくらいの確なものなのか全く分からない。

週に1度行われている週間カンファレンスではストレートマスターが集まり、インターンシップでの学びを交流し合い、最近の教育的課題について議論する機会をもっている。探究的な学びを実践する場としての役割はもちろんのこと、将来教員として必要となるであろう探究的な学びをデザインする力もこのカンファレンスの中で培っていく。これまでの活動では公教育の意義を探ったり、探究サイクルを意識した授業づくりに挑戦したりしてきた。公教育の意義を探る取り組みでは国語科の学習を取り上げ、特に古典に着目して、古典学習の意義はどのようなものか探究してみた。歴代の学習指導要領の検討や国語という教科が生み出された背景、古典に関する授業の実践や諸外国での古典学習の事例の調査…と様々なアプローチから探究しようと試みたものの、活動に一区切りがついた現在でもあまり納得のいく答えは見つかっておらず、“分からない”ままである。探究サイクルを意識した授業づくりにおいても、とりあえず必死にサイクルを描く授業展開を構想してカンファレンスの俎上に載せたものの、これを実践すれば本当に探究的な学びが実現できるのか分からないし、そもそも何ができれば探究的な学びとなるのかすら、あまり分かっていないのかもしれない。

このように、蓋を開けてみれば自身の学びも日々“分からない”ことの連続であった。そして“分からない”ことはどれも、インターンシップで学校現場に身を置いたからこそ生じたものであるし、週間カンファレンスの中で議論したからこそ考えた事柄であるのだ。これらの“分からない”は、もし教職大学院に来なければ味わう機会は無かったのかもしれない。そして最近、自分はどんな教員になりたいのだろうか？そんな根本的な問いでさえ考え込んでしまう。

これも教職大学院に入ったからこそ味わった“分からない”ことなのかもしれない。“分からない”ことを見つけるからこそ、新たな学びへの展望が開けていく。開けないこともあるのだが、少なくとも次の学びへのきっかけ作りにはなる。まもなく私は M2 を迎え、これまでは手探りだった教職大学院での学び

をより充実させていかなければならない時期になっていく。週間カンファレンスでは新しい M1 を迎え、後輩をサポートする立場にもなる。今後とも“分からない”ことに向き合って葛藤しつつ、1 つでも多くの“分からない”を解決することを目指しつつ、新たな“分からない”を見つけていくことを目標としたい。

M1 の関係を通して考えたこと

授業研究・教職専門性開発コース 1 年 / 福井市明新小学校 吉田 聖

教職大学院に入学するまで、私は積極的に話したり、行動したりするような人間ではなかった。大学時代は意見を言わず、友人の意見に合わせて行動することが多々あったように感じる。そのため、自分の考えや意見をあまり出さず、ただ周りの雰囲気流される大学生生活を送っていた。自分が意見を言うことで周りに迷惑をかけてしまうのではないかと考えてしまい、何も言わないようにしていた。

そのような自分の考え方が変わっていったのは教職大学院に入学して同学年の仲間と出会えたことだ。仲間たちと出会えたことで、自分の考えを持つことができ、なおかつ、それを発言していけるようになった。その要因としては、M1 全体の雰囲気が良かったことが挙げられる。こちらの考えを聞いてくれて、それを否定から入るのではなく、まずは認めてくれた上で別の視点からの意見をくれることが多くあった。このような話し合いが M1 同士の中で常に行われていた。M1 との話し合いのおかげで、自分というものを客観的に見ることができ、自分が何を考えているのか、何を感しているのか見ることができるようになったと考えている。

M1 がなぜ、話し合いがしやすい雰囲気を作ることができたのかを考察していくと、普段からの何気ないコミュニケーションを大事にしていたからではないかと考えている。カンファレンスで行われる話し合いの場だけではなく、昼休憩の時にみんなで集まって何気ない話をしたりゲームをしたり、休日に集まって遊んだりすることで M1 の中を深めていけたのではないだろうか。さらに考察していくと、大学院での学習を通して私たちは関係を深めていけたのだろうと考えた。

大学院での学習としては PISA や授業作り、公教育における教科の意義について学んできた。入学当初は当たり前なことだがそこまで仲良くなかった。M1 の仲間という感じはなかった。同期の中でも気

が合った人たちとだけ仲良くしている関係だった。そこから M1 の仲間というものを意識するようになったのは PISA がきっかけだと感じている。2 つのグループには分かれてしまったが M1 が初めて協力して考えていった学習である。この学習を深めていく中でほかの M1 が何を考えて資料を選んできたのか知りたいと考えるようになり、この人はどういう人なのだろうという興味がわいていった。そこから昼休憩の時にはみんなで集まるようになり話をするようになった。しかし、この段階ではまだ、ただの友達のグループでしかない。ここから、実践するコミュニティに成長していったのは、11 月の公教育における教科の意義について学んでいた時だ。ここで、M1 全員が何を学んでいるのか分からなくなってしまったのだが、M1 で集まり意見を交換しながら考え方や学びを深めていくことができた。

この 1 年間の大学院での学びの中で私が成長したと実感した部分として、自分の意見を言えるようになったことと、積極的に他の人の意見を取り入れるようになったことが挙げられる。これらは、この文章の最初にも言った通り、M1 の話し合いの雰囲気が良かったことが理由として挙げられる。また、話し合いをしていくことで私自身の考え方を広げていきたいという想いが芽生えていったことも理由になってくるだろう。これは、他の学年にはない M1 だけの強みと言っても良いと考えている。ただし、これらを M1 のコミュニティの中だけでとどめるのではなく教職大学院全体に広めていく必要もあると考えている。そうすることで、カンファレンスの雰囲気も堅苦しいものではなく柔らかい雰囲気になり話し合いにも素直な意見が増えていき、学びにも深まりが出てくるのではないだろうか。

M1 の関係を踏まえた上で、大学院での学びを振り返ると、大学院のカンファレンスは教職専攻の人たちが集まれる場所なのだから、もっと話し合いの場

を設けても良かったと感じている。全くなかったというわけではないが、それでもカンファレンスだからこそ、カンファレンスでしかできないことはあるのではないかと考えている。その一つとして話し合いがあると考えている。様々な考え方を持った人が集まり、学びを深めるために、意見を出し合い共有することができる場ではないのだろうか。

カンファレンスは教え合う場ではなく、学び合う場だと考えているので、私は来年度のカンファレンスでは、1年間学んでいるから、たくさんを経

験しているからという考え方は持たず、それぞれが感じたこと、考えことを尊重しながら話し合いを進めていけるようにしていきたい。

来年度の福井大学の大学院は教職大学院に一元化され、今年とは違うものになっていくだろう。私たちがカリキュラムや大学院の在り方を変えることはできないが、そういった大きいものではなく、雰囲気や、人との関係づくりの点では私たちでも変えていけるはずなので、努力していきたい。

ミドルリーダー・マネジメントコース便り

教職大学院における学びを振り返って

実践し省察するコミュニティ～福井ラウンドテーブルと私

学校改革マネジメントコース2年／嶺南教育事務所研修課 田結 清高

2年に渡り教職大学院で学んできた。自身の実践をこんなにもていねいに振り返り意味付けながら行ったことはなかった。書き溜めた記録を見直す中で新しい文脈に出会い、関係がないと思いついていたものが連なりをもって見えてくる。そのような学びの経験は非常に新鮮で興味深いものであった。

今年で嶺南教育事務所に勤務して3年が経つ。このタイミングで教職大学院の学びを経験できたことは非常に幸運であった。事務所の2年目(教職大学院1年目)は、1年目に感じていた目の前の問いに愚直に取り組んだ。続く3年目(教職大学院2年目)には省察を交えて見直し、自身の実践の価値付けを進めていった。1年目の経験があったおかげで2年目から具体的に取り組むことができたし、2年目の実践があったおかげで3年目には自身の実践を少し引いたところから客観的に眺めている自分自身の姿を感じることもできた。このような長いスパンで自身の実践を捉え返すとき、ようやくそこに実践の連なりというべきものが生まれてくる。このような学びを実

現するためには、2年ないしは3年という時間の流れが最低限必要なのだと思う。

小グループによる対話の手法をとった学びの形はとて新鮮であった。学校現場では、時間のかかるやり方は敬遠されがちであるが、一人一人が主体性を持って学び合うということを実地に経験できた。また、それによって得られるもの——例えば、情意的なつながりであったり、多角的な視点であったり、経験知や実践知など——これらは単なる知識として理解されるものではなく、他者との交流の中で育まれ、自分の中に取り込まれていくものだと分かった。このような学びの中で、自身の対話スキルの未熟さに気付かされ、グループ全体の探究を深められるような関わり方を身につける必要性を感じている。

話は変わるが、この2月15日、16日に福井ラウンドテーブルが開催される。今回で教職大学院生として4回目の参加となる。このラウンドテーブルも私にとって重要な意味を持つ学びの場であった。特に印象深いのは、1年前のスプリングセッションである。

シンポジウムのテーマは、『これからの地方国立大学の教員養成が進むべき方向性を問う』であり、地域における教員不足や教員数の格差問題について議論した。話題の中心が嶺南出身の教員確保の視点から発せられ、嶺南教育事務所に所属する私にとっては、まさに自分事の話題なのであった。他県においても深刻な教員数の地域格差が存在することや教員の養成～採用～研修と連なる流れがよく理解でき、有意義な時間となった。また、このシンポジウムを発端として、本県嶺南地方と岡山県北地方の間に交流が持たれ、2020年2月13日(木)に当事務所で開催する嶺南教育実践フォーラムにも、岡山県津山教育事務所から多数の視察団を迎え入れる予定となっている。(この原稿を書いているのは1月23日。)

さて、福井ラウンドテーブルの一つの醍醐味は、何と言っても2日目のクロスセッションであろう。ここでは、職種、地域性、年齢構成など、多様なメンバーが交流し学びを深め合う。

教職大学院1年目の私は、行政職における自身の実践が研究課題である学校改革マネジメントとどう結びつくのかという接点を見出せずに苦慮していた。そのような私にとって、ポスターセッションとクロスセッションで発表をするために、そこで何を語るのかについて考えることは非常に大きな転機となった。現在実践していることが、学校現場とどうつながるのか、マネジメントとしてどのような意味を持って

いるのかについて問い直す契機となってくれたのである。

また、このときのグループ編成も大変恵まれた組み合わせだった。大学准教授、学校管理職、教諭、会社員、行政職員と多彩な顔触れで、異なる立場から多角的な視点が示され、私の取り組みをそれぞれに価値づけてくださった。この経験が実践の方向性に迷いを生じていた私を大いに力づけ、その後の実践に自信を持って取り組むための活力源となってくれた。次のラウンドテーブルで、このときのメンバーと大学構内ですれ違った際に、先様から声をかけていただいて、大変温かい気持ちになったのは今も記憶に新しい。

私にとっての福井ラウンドテーブルは、最新の教育課題に触れられる場でもあり、自身の実践を振り返り意味づけ直す場でもあり、多様性によって新たな視点を得られる場でもある。それは刺激に満ちた貴重な学びの機会である。今回のラウンドテーブルでは、どのようなメンバーと出会い、学びを深め合うことになるのであろうか。私の長期実践研究報告はどのように受け入れられるのであろうか。そして、現在の私に一体どのような気づきをもたらしてくれるのであろうか。実践し省察するコミュニティへの期待は尽きない。この一期一会を心から楽しみたいと思う。

学校改革マネジメントコースでの2年間の学びを振り返って

学校改革マネジメントコース2年／美浜町立美浜中学校 織田 恭直

福井大学連合教職大学院での2年間の学びを振り返ると、学びの柱となる取組は「カンファレンス」と「長期実践報告」であることが明らかである。「カンファレンス」で「語る」こと、「傾聴する」こと、「長期実践記録」を「書く」ことが、私の中での学びを形成していった。

他者から何かを教えてもらうインプット中心の学びではない。教えてもらおうという姿勢では、この場での学びで得るものは少なくなってしまうと感じる。すでに自分の内にあるものを、どのような文脈の中に位置付けてアウトプットするか、それが最も大切であった。同時に、他者がアウトプットしたものを同じ教育の実践者として自分自身の実践の中に位置づけて捉える営みの中で、自分自身の実践を捉え直す

ことが大切であった。特に「傾聴する」行いの中では、今語られている実践の背後にはどのような思いがあるのか、それを意識して聞くことが大切だった。語っている人の思いに寄り添いながら聞くことで、語られている実践のつながりが見えてくることもある。それは自分自身の実践のつながりに気がつくことと同義であった。

「語る」「傾聴する」「書く」、連合教職大学院でのこの3つの学びの活動を通して、私が今まで考え行ってきた教育実践を、これまでの教師人生の文脈の中に位置付けて捉え直すことに挑戦したいという思いが次第に強くなっていった。そこで、長期実践記録も当初の構想を大きく変更して、私の教師生活を振り返る長い営みの中での実践を記載していくこと

にした。頭の中に描かれる当時の実践やその思いはあるのだが、それを文字言語で表現することは相当な労力を要する作業だった。ある時点での出来事を記述しているときに、「あっ！」と別時点での取組とのつながりに気が付いて書くべきことを思い出すなど、長い時間軸の中を行きつ戻りつしては、記述し直すことがたびたびあった。

私は今まで、小学校・中学校・行政と経験してきた。その中でもさまざまな役割を与えられてきた。大学院での研修も今回が2回目である。教職経験年数も20年を超え、多くの職種や役割、研修を経験し、今自信に満ち溢れた自分が存在しているかといえそうとは言い切れない。長期実践記録を書きながら振り返ってみると、一番自信に満ち溢れていたのは2校目の小学校勤務時であったように思う。転機はその後の2回目の行政勤務であった。そこで根本的に働き方について考え直すことを迫られた。結果、業務

遂行に関わる物事を捉える新たな視点を獲得したように思う。現在、2回目の美浜中学校勤務、2回目の大学院での研修を進めてきている。迷いや不安を感じながらの日々である。一つの物事に、多様な矢印を向けて考えるようになってきている。獲得した新たな視点が、迷いや不安を生み出している原因でもあると感じている。こうした視点を身につけたことは、どのような意味を持つのか。これから先の教師生活の文脈の中に位置付けて捉え直すことができるようになった時に、見えてくるのかもしれない。

福井大学連合教職大学院学校改革・マネジメントコースでの2年間の研修を終えようとしている今、そんなふう思う。

長期実践報告書を書いてみて

学校改革マネジメントコース2年／福井県高志高等学校 今澤 泰秀

長期実践報告書を書き終えた。なかなか筆が進まず、背表紙に文字がかかるか心配していたが、なんとかその点はクリアしたようである。

さて、わたしの取組は、学校改革の一環として前任校の丸岡高校の校長先生から依頼を受けて始まったものであり、これまで自分が取り組んできたことの延長上に学校改革がある訳ではなかったもので、この長期実践報告書に自分史を載せることに非常に疑問を感じながら執筆を始めた。できれば、載せないでおこうと思ったが、先輩諸氏の報告書を見ると大概載っているのだから、大学院の先生に相談したところ、「今澤先生をよく知っている人が読むのであれば、無くても構わないが、そうではない人もこの長期実践報告を読む。そうした場合、実践の中でなぜ今澤先生がそのような考え方をするのか、なぜそのような行動に出たのかなど、文字に現れない背景を読み取ることができない。しかし、自分史を読めば、今澤先生という一人の教師がどのように形成されてきたかがわかるため、報告書を読む助けとなる」と言われた。なるほどと、自分史を載せる意義を納得できたので、載せることにした。ただし、前述したとおり、これまで

の取組の延長上に学校改革がある訳ではなかったもので、学校改革の取組について述べた後に載せることにした。

私のテーマは「組織的・継続的な授業改善の実現～コアづくりの重要性～」だが、自分史を書いてみて、改めてコアづくりの重要性を感じることができた。コアというのは「コミュニティ・オブ・プラクティス」に出てくるワードである。30代半ばから後半にかけて理科教科会のメンバーで勉強会を作ったり、それとは別に今も続く物理化学勉強会を作ったりしたのだが、いずれも私の近くに一緒にやろうと賛同してくれた人たちがいた。この人たちが居なかったらそれぞれの勉強会は立ち上がらなかったと思う。コアメンバーが居るから、それを核としたコミュニティを形成していくことができるのだ。学校改革の取組では、私も含め校務の一環として、割り当てられたメンバーが集まって授業改善に関する取組を行っていったのだが、勉強会のコアとはやはり異なっており、なかなかうまく事が運ばなかった。

丸岡高校では割り当てられたメンバーが徐々に真のコアになっていき、授業改善の取組もそれに伴っ

て進展していった。高志高校では、私自身が高志高校に慣れるのに時間がかかっていることや、他の要因も重なったため、残念ながらまだコア化しておらず、授業改善の取組もまだ緒についたばかりといった状態のままである。

教職大学院では、「コミュニティ・オブ・プラクティス」の他「学習する組織」も読む。前者は、組織を立ち上げる際に役立つ本である。後者には、前者には述べられていないコミュニティを長続きさせるために必要なディシプリンが述べられているので、組織

が立ち上がりある程度軌道に乗ってきたときに役立つ本である。私の実践は、実践の途中で異動があったため1年目の取組を2校分報告することになってしまった。そのため前者をかなり重視した取組となっているが、ある程度、取組が軌道に乗ってきた際には後者を読み返し、組織づくりの一助としていきたい。

最後になったが、私の拙い実践を陰に陽に支えてくださった教職大学院の先生方、職場の先生方に感謝を申し上げ、本稿の筆を置くことにする。

各地ラウンドテーブル参加報告(その2)

東京ラウンドテーブル 2019 参加報告

福井大学連合教職大学院 特命助教 矢内 琴江

2019年12月15日(土)に、東京の明治大学にて、実践研究東京ラウンドテーブル実行委員会、全国社会教育職員養成研究連絡協議会、明治大学主催で「実践し省察するコミュニティ 実践研究東京ラウンドテーブル」(東京ラウンドテーブル)が開催されました。福井大学教職大学院からは、5名が参加しました。私自身、大学院生のときから、この東京ラウンドテーブルの実行委員会で東京ラウンドテーブルの企画運営に携わってきました。今回は、福井大学の先生方と一緒に参加できたことを大変嬉しく思っています。当日の内容や様子については、参加された教職大学院のスタッフの先生方が、詳細に記録してくださったので、ここでは簡単に、東京ラウンドテーブルの概要について紹介します。

東京ラウンドテーブルは、2005年から「実践研究東京ラウンドテーブル」として、社会教育学会のメンバーが中心となって始まりました。始まったころの記録を見ると、その当時から、参加者には、関東圏の

社会教育関係者(公民館、NPO・NGOなどのスタッフ)や学生だけではなく、福井大学の学部生や院生がいて、探求ネットワークや、インターンシップの経験を語っています。さて、「実践研究東京ラウンドテーブル」の実行委員会は、その後、2015年ごろからは、お茶の水女子大学での社会教育主事講習の修了生も加わって、社会教育関係施設の職員、活動している市民、大学教員で構成されることとなりました。そして、ラウンドテーブルを企画運営する活動自体が、共同学習の場として展開してきました。今年度もまた、社会教育を専門とする大学教員だけではなく、公民館の職員の方たちと一緒に実行委員会が組織され開催されていました。前半はシンポジウム、後半がラウンドテーブルとなっています。そして、社会教育関係の施設職員、市役所職員、学校教員、保健師、学生、高校生といった多様な領域・異なる世代と地域の方たちの参加で、豊かな学びの時間をもつことが出来ました。

東京ラウンドテーブルに参加して

福井大学連合教職大学院 中川 美津恵

2020年度から社会教育主事養成課程では社会教育実習が必修化されます。そのため大学等では実習先の確保や実習プログラムの計画に懸命です。大学側は学生に本当の力をつけるため、どのような実習がふさわしいか、悩んでいるのが実状であり、先行する好事例として、今回のラウンドテーブルでは東京都豊島区の生涯学習施設の取組が紹介されました。実行委員長の平川景子先生ら委員会の方々、社養協の方々のご尽力で令和元年も押し詰まった12月15日、明治大学グローバルフロントで開催されました。

「学生の関心に対応した実習プログラム」の演題で、豊島区にある「みらい館大明」副館長の荘司哲夫さんが受け入れ先の立場から、続いて立教大学科目等履修生の井上慶太郎さんが実習生の立場で報告がありました。

「みらい館大明」は小学校閉校跡の施設をNPO法人が管理運営しています。驚いたのは教室や体育館等の貸出料金を主に運営する独立採算制をとっている点です。また、演劇が盛んな池袋という土地柄もあって、主に1階は地域団体、2階は演劇団体、3階はテレビや雑誌等の撮影場所に活用されています。シニア、子ども、20~30代と多世代の利用があり、年間延べ21万人超の利用者をバイトを含む20名足らずのスタッフがサポートしています。生きづらさを抱える若者を支援する「ブックカフェ」の事業は区と協働して行い、旧図書室を開放し、気楽に読書やお茶をしに来られる居場所をつくっています。利用者を増やすよりあえて隠れ家的な場所のままにというのも、利用者の気持ちや館活用の形態等がよく考慮されていると納得できます。

「みらい館大明」では実習生を年間10名ほど受け入れ、実習生の興味や特性に応じた業務内容を体験する研修を実施しています。受け入れ側のメリット

としては若者の視点で事業を検証する機会を得られるため、事業の軌道修正や地域の活性化につながることで、課題としては実習生の個別の興味への対応、取り組む姿勢等による成果のばらつきなどが挙げられましたが、事業内容の豊富さ、幅広い年代層とのコミュニケーション力を培う場が提供されていることに感心しました。地域の課題、ニーズに敏感でマネジメント能力が高い荘司さんに負うところも大きいと思います。

井上さんは新しいワークショップ「はてなかるた」を企画し、運営された8日間の実習報告でした。自らの頭で考える人を増やしたいと、参加者に身の回りの疑問をかるたに書いてもらいディスカッション。さらに疑問のランク付けをし、意見交換。その後、SNSで気になる疑問を選ぶというものです。参加者からは、疑問をシェアすることで思いがけない新しい視点が得られたなど好評でした。スタッフの助言や演劇ワークショップ体験などを生かして、独自のワークショップ作りに挑戦した井上さんは、実習を通して業務に責任を持ち主体的になれた、市民との関わりに積極的になれたと、振り返り評価しています。

実習生の能力を活かす環境、実習生の個性を柔軟に受け入れるスタッフの姿勢に好感が持てました。

午後からはラウンドテーブル。少人数で実践を振り返り、聴き合い、学び合う時間は緊張の場でもあり、楽しみの場にもなっています。今回、ファシリテーターとして参加しましたが、自分の実践を自らの言葉で語ろうと努める語り手、じっくり耳を傾け、上質な問いを発する聴き手によって、多くの気付きがあり、協働の学びがありました。ファシリテートする難しさややり甲斐を実感した1日となりました。

東京ラウンドテーブルに参加して in 明治大学

福井県教育総合研究所 教職研修センター 森田 史生

12月15日(日)明治大学で開催された「東京ラウンドテーブル」に参加させていただいた。この東京ラウンドテーブルは、明治大学や早稲田大学の社会教育を専門にする教員の方々が運営されているため、社会教育関係者が多く学校教育関係者が少ないという、他のラウンドテーブルとは違う特徴があり、他では味わえない雰囲気が楽しみであった。今回は50名程度の参加者とこぢんまりしているが、とても和やかな雰囲気の中始まった。参加者の所属を見てみると、公民館職員、NPO職員、区役所生涯学習担当職員、大学教員、民間企業、大学院生、学校関係など多様である。

最初のセッションでは、「社会教育実習の意味」として、豊島区の廃校となった小学校を生涯学習施設として区が改築し、この施設をNPO法人が区の補助金なしに運営している「みらい館大明」の取組みについての発表であった。2020年度から社会教育主事養成課程で社会教育実習が必修化になるように、実習先の確保や実習生のよりよい学びをどのようにつくっていくかが課題になっているようだ。補助金なしの運営を行っている「みらい館大明」では、公民館とは違った方法で独立採算しなければならないが、区民や利用者のニーズに合わせながらも、独自のアイデアをもとにマネジメントされている取組みは生涯学習施設の新たな在り方だと感じた。廃校後の再利用としても魅力的であるが、人口が多いところだからできる内容でもある。人口減少を抱える地域では難しいと感じるものでもあった。

次のセッションのラウンドテーブルでは福井県の

教員研修を通して、教員一人一人の資質向上を目指す取組みについて発表を行った。ホームである福井で発表するときはバックグラウンドがあるため気が楽だが、アウェイである東京で発表するときは、教員の仕事とは(特に最近よく耳にする”ブラック”と言われてしまう現状)、福井県の教育の現状、教師の資質・能力とは何か、教員の研修の意義などを話すときも、より丁寧に言葉を発していかなければならない。福井では当たり前のことでも、もう一度目的や意義を捉え直して話すことになる。70分の発表時間はあっという間に過ぎ、発表しながらの省察と質問を受けながらの省察、他者の実践を聞きながらの省察が繰り返し湧き上がってくる有意義な時間となった。

参加者の中に福井大学教職大学院修了生の小川駿也先生(高志中学校)が自主的に参加されていた。院生時代から東京ラウンドで発表していて、現役教員になってからも東京ラウンドで発表することが1年間の授業研究サイクルの一部になっていたようだ。アウトプットするサイクルが教員になってからも持続している学びを構築している姿に教職大学院の学びのつながりを感じた。



東京ラウンドテーブルに参加して

福井大学連合教職大学院 准教授 新井 豊吉

2019年12月15日に明治大学にて行われた「実践し省察するコミュニティ」に参加してきました。午前中はシンポジウム、午後は45名を9つのグループに分けてのラウンドテーブルが行われました。シンポ

ジウムは生涯学習施設みらい館大明の副館長、荘司哲夫氏が「学生の関心に対応した実習プログラム」について話題提供されました。もう一人はそこで実習を行った立教大学の科目等履修生である井上慶太郎

氏が「ワークショップを作る実習」について報告されました。ユニークだったことは会場には学生を送り出す側の立教大学の教員も参加しており、実習生本人、受け入れる側、送り出す側が揃い、それぞれの立場での意見交換がなされたことです。

みらい館大明は旧小学校を活用した非常に特色ある施設です。池袋という外国人も多く、演劇も盛んな場所に位置しています。運営資金は補助金を得ず自前で調達しており、その内訳は地域サークルの活動場所として貸し出すことはもちろんのこと、演劇団体の稽古場、映画、ドラマ、雑誌等での撮影場所として提供しており、収入のほとんどはそれらの貸出料でまかっています。もうひとつ注目した活動はブックカフェの運営です。引きこもりやニート等社会から孤立しがちな若者が気軽に立ち寄ることができる場として活用されています。若者が多い地域ではありますが、それでも利用者の高齢化が課題となっ

ています。また有能なスタッフの定着、育成を図るためには待遇改善も大きな課題となっているということです。

実習生の井上氏は8日間の大明での実習を通して運営体制を学ぶとともにワークショップの企画・運営を経験しました。特に、世の中の難問を解決する「はてなかるた」の企画は参加者全員が楽しめるものとなったようです。

午後のラウンドテーブルではファシリテーターをさせていただきました。わたしのグループは生涯学習支援課スタッフ、プレーパーク運営委員、市役所職員、保健師という構成でした。わたしを含め高齢となった者がかつて経験していた地域で当たり前のようであった自然からの学びや学校と地域と人との交流を、現在は意図的に設定し提供する必要がある、そのためにはどのような活動が必要であるか、という中身の濃い話し合いがなされました。

東京ラウンドテーブルに参加して

福井大学連合教職大学院／福井大学附属特別支援学校 常廣 和美

初めての東京でのシンポジウム参加であったが、会場は親和的な空気に包まれて、すぐに打ち解けることができた。何か同じベクトルを感じたからだろうか。

午前の池袋で空き校舎を利用して社会教育を行うNPO法人の取り組みは「若者支援」の一面が最も重要な要素であると感じた。組織全体にマンパワーが漲り、ニーズの豊富な東京ならではのものだという印象があった。一方で福井ではどうか。個人的な印象だが、特に福祉と行政の狭間で困り感を抱える方に、必要とする仕組みにつなげるまでの支援が難しかったり、仕組みそのものが不安定であったり、キーパーソンに委ねられ過ぎていたりする。さらに池袋の事例で、実習生がイベントを企画し実施するまでの過程で、スタッフがまさに実習生と協働し、次の新たなイベントにまでつなげていた。附属校で同じように実習生を受け入れる側として、教育実習の学生と教師も学び合える場となるように、実習生を受け入れる姿勢について考えさせられた。

午後の報告では国分寺市の公民館での取り組みを伺った。地域からのニーズで人権教育について、企画、

実施していった事例である。年間計画にない飛び込みの企画であってもNPOでは柔軟に対応できる面があるようだ。住民のニーズに即対応することの意義が、本校の生活教育と同様のものを感じた。年間計画や一時間ごとの授業計画がきっちりと決まっている場合は活動が子ども主体になりにくかった事例を自分が紹介すると、看護師さんや公民館の職員の方、大学教員の方も共感してくださった。また、公民館が障害者の活動の場も作っていることに感動した。高等部を卒業した後、余暇の場としてグループで活動内容などを決め実践し、さらに自主活動グループにまで進化させていることを伺った。福井では高等部卒業後、仕事や家庭以外の「楽しむ場」「自分たちの場」が少ない。事業所や自主グループがあるが、公的な支援が得られにくいのが現状である。福井にはない文化や取り組みを学び、自分たちの実践や考えに別の領域の方々が共感し、背中を押してくださった。2月の福井ラウンドテーブルで再会できることを期待しつつ、周囲の方々と協働して実践し省察を重ねたいとの思いを新たにできた。

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Spring Sessions 2020
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session in University of Fukui

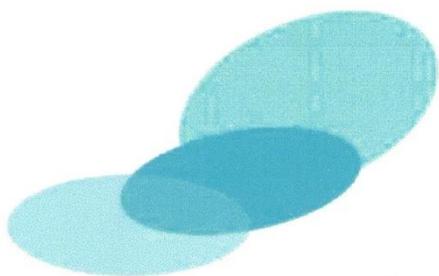
実践研究 福井ラウンドテーブル

2020 spring sessions

15(sat) 13:00-17:40

16(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）総合研究棟



探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2020.2.15-16

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

共催 社会教育実践研究フォーラム

後援 福井県教育委員会・福井観光コンベンションビューロー

実践研究 福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session
in University of Fukui since 2001

2/15(sat) 13:00-17:40

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校:21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
対話を編み込み、実践をデザインし、文化を創り出す
- B 教師①働き方改革と学び合う学校づくり:組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメント
②専門職としての学びのプロセス:対人援助職のための省察的実践の場を組織する
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする
地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるか
- D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う **knowledge fair**

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る **symposiums**

session III 16:00-17:40 テーマ別話し合い 問いを深める **forums**

2/16(sun) 8:20-14:00

Session IV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体(コミュニティ)に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 参加申し込みが必要です。以下 URL 申込フォームからお願いいたします。

<https://goo.gl/forms/M1pFwu3kmm1ulbE13>

- 2/16の session IV の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

- 2/16の session IV の参加についてのお願いは午前午後全日程(8:20-14:00)の参加をお願いします。ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくご願ひいたします。

プログラムの変更等があり得ます。

最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2020.2.15-16

Zone A 学校

21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

ー対話を編み込み、実践をデザインし、文化を創り出すー

Zone A ではこれまで、「専門職の学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities)」を培う学校改革のビジョンにもとづき、「21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げ、学校が持続発展していくための教師協働の在り方について議論を積み重ねてきました。今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2020 Spring Sessions では、教師、子ども、保護者、地域社会がともに学び合うコミュニティを学校にデザインする上で鍵となる「ミドルリーダーシップ」に焦点を当て、「Leading from the Middle: ミドルからのリード」をいかに実現し、そしてサポートできるのかを、参加者のみなさまとともに協働探究していきます。特にシンポジウムでは、「21 世紀の学び」についても確認しながら対話と議論を重ね、これまで Zone A で蓄積してきた知見をさらに前進させていきます。

Orientation 13:00-13:10

Session I 13:10-14:10 *Knowledge fair* (ポスターセッション)

福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

Session II 14:20-15:50 *Symposiums* 21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
 <シンポジスト>

東京都板橋区立赤塚第二中学校・教諭 名地 太輔 氏

新潟大学教育学部附属新潟中学校・教諭 上村 慎吾 氏

信州大学教育学部附属松本中学校・副校長 宮下 哲 氏

<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院・准教授 木村 優 氏

Session III 16:00-17:40

Forums 対話を編み込み、実践をデザインし、文化を生み出す

Session II の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。

Zone B 1 教師教育

働き方改革と学び合う学校づくり

ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

今日の学校教育には、これからの変化の激しい時代において持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が求められています。また、教員の大量退職に伴い、若い世代の教員を支え育てる組織づくりも必要とされるなど、学校は大きな変革のなかにあります。他方で、教員の働き方改革も急務とされています。こうした状況のなかで教育に携わる者

の多くは、教育の質的向上と働き方改革とは一方を推進すれば他方が停滞するというディレンマに悩まされているのではないのでしょうか。

Zone B1 では、現状を克服し、教育の質的向上と働き方改革との両立を目指して、自治体における具体的な事例なども踏まえながら、行事の精選や教員の会議の削減などに止まらず、教師の働き方改革を実現しつつ教育の質的向上を図るためのカリキュラムマネジメントや教師が学び合うコミュニティとしての学校のあり方について展望を拓いていきます。

Orientation 13:00-13:10

Session I 13:10-14:10 Knowledge fair (ポスターセッション)

Session II 14:20-15:50 Symposium

<シンポジスト>

福井県教育庁学校振興課・課長 小林 利幸 氏

福井県教育総合研究所・所長 牧野 行治 氏

福井市明道中学校・校長 (福井県中学校長会会長) 北川 裕之 氏

<コメンテーター>

文部科学省総合教育政策局教育人材政策課・課長 柳澤 好治 氏

<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院・教授 淵本 幸嗣 氏

Session III 16:00-17:40 Forums

<実践報告者>

福井大学連合教職大学院・准教授

(教育学部附属義務教育学校・後期課程統括研究主任)

柳 博恵 氏

福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程教務主任

柳本 一休 氏

越前町立宮崎中学校・教諭 (第3学年主任、進路指導主事)

幸坂 浩 氏

シンポジウム及び実践報告を踏まえ、小グループで協議します。

Zone B2 教師教育

専門職としての学びのプロセス

—対人援助職のための省察的実践の場を組織する—

教師や心理職、保育士・看護師・介護士といった専門職は、人との係わり合いがその仕事の根幹を成す対人援助職です。対人援助職においては、刻々と変化する状況の中で、その時々状況と相手に合わせた支援を行なうことが求められることから、確立された特定の知識や技術を学びそれを実践に応用するという枠組みの中だけで、その資質・能力を培うことはできません。対人援助職としての専門性を培うためには、実際的な係わり合いの場面に身を置くこと、実践の場での自身の行為について振り返り、自身の行為がもつ意味やそうした行為を支える自身の認識の枠組みについて状況の中で検討すること、そうした検討を通じて次の支援の方向性をあらためること、そうした実践と省察の絶え間ない往還を欠かすことはできません。

多くの対人援助職の養成課程においては、学生が実践を行なう機会としての「実習」がそのカリキュラム内に位置付けられていますが、そうした「実習」が省察的実践者としての対人援助職の成長を支えるものとなるためには、どのような取り組みが求められるのでしょうか。

今回のラウンドテーブルでは、学生は実習で得た経験をいかに捉え、振り返り、意味付けているのかについての学生自身の語りを聴くことを通じて、対人援助職としての学びのプロセスを探り、参加者の皆様と議論を深めたいと思います。また、多様な領域における専門職としての学びのプロセスを交流することを通じ、対人

援助職としての省察的実践の場をいかに組織するのか、対人援助職養成のあり方についても議論を重ねていきたいと思ひます。

<i>Orientation</i>	13:00-13:10	
<i>Session I</i>	13:10-14:10	<i>Knowledge fair</i> (ポスターセッション) 福井県内の学校
<i>Session II</i>	14:20-15:50	<i>Symposiums</i>
<報告者>		福井大学教職大学院生/その他
<コメンテーター>		早稲田大学 村田晶子氏
<i>Session III</i>	16:00-17:40	<i>Forums</i>
	16:00-17:00	小グループ形式での学生による実践報告 福井大学、玉川大学、岐阜聖徳学園大学、駒沢女子大学 他
	17:00-17:40	振り返り (教員・実践者/学生)

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

ー地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるかー

この間 Zone C では「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマを長期に渡り検討しています。前回は「地域と学校のつながりを編み直す」というサブテーマで、地域と学校それぞれの立場からの実践報告を共有しながら本テーマについて探究を行いました。その探究のプロセスを踏まえ、今回は「地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるか」をサブテーマに、お互いの取り組みから学び合いたいと思ひます。

地域には様々な人がいて、その人たちは地域の多様なコミュニティの活動をつくり支えています。そうした人々の力が発揮できる学びは、どのように支えることができるでしょうか。また、いま地域の様々な活動は、世代継承の問題に直面しています。世代継承のサイクルは、どのように生み出すことができるのでしょうか。

地域のなかの多様性と、長期的展望の観点にたちながら、地域のこれからを拓く担い手を、いかにコミュニティの活動を通して育み支えていくかを考え合いたいと思ひます。住民との対話を通じたまちづくりをコーディネートしている市の職員の方の取り組みや、地域の多様で多層なコミュニティの学びをコーディネートする公民館主事さんの活動、そして会場のみなさんそれぞれの取り組みから、共に考え合いたいと思ひます。

<i>Orientation</i>	13:00-13:10	
<i>Session I</i>	13:10-14:10	<i>Knowledge fair</i> (ポスターセッション) 福井県内の公民館、福井大学探求ネットワーク 他
<i>Session II</i>	14:20-15:50	<i>Symposiums</i>
<シンポジスト>		福井市和田公民館 館長 北島 喜一 氏

福井市役所 国見地区地域担当職員 西澤 公太 氏

<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院 富永 良史 氏、矢内 琴江 氏

SessionIII 16:00-17:40

Forums

SessionII での課題の提起を踏まえ、5~6 人の小グループとなり実践を交流
します

Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

これまで Zone D では、「子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか」というテーマで、特に探究的な学習を支えるためにどのように授業研究・保育研究を組織していくと良いのか考えてきました。今回は、このテーマを掘り下げて考えていく視点として、「新しい世代を支え学びあう授業研究」に焦点を当て考えます。シンポジウムでは、「新しい世代を支え学びあう授業研究」に取り組んできた実践報告に加え、エジプト・アラブ共和国及びマラウイ共和国にて授業研究に取り組んでいる立場から、日本の授業研究の特徴を浮き彫りにするとともに、我が国の授業研究を牽引してきた立場から、今後の授業研究の方向性について探っていきます。シンポジウムで出てきた問題提起を踏まえて、フォーラムでは、保幼小・中高・特別支援という 3 領域に分かれ、各領域での話題提供を手がかりに、参加者がそれぞれの校種や領域で具体的に実践を捉え直していきます。

Orientation 13:00-13:10

Session I 13:10-14:10

Knowledge fair (ポスターセッション)

福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

SessionII 14:20-15:50

Symposiums 新しい世代を支え学びあう授業研究

<シンポジスト>

福井市至民中学校・校長 小林 真由美 氏

千葉県立保健医療大学・准教授 福島 昌子 氏

<ディスカサント>

エジプトカイロ大学文学部日本語専門翻訳専攻長 アリ リナ 氏

マラウイ共和国ナリクレ教員養成 校長代理

マティアス ジャヌアリー 氏

教職員支援機構・次世代教育推進センター長 大杉 昭英 氏

<コーディネーター>

福井大学連合教職開発研究科・教授 三田村 彰 氏

福井大学連合教職開発研究科・講師 高阪 将人 氏

SessionIII 16:00-17:40

Forums 多様な授業研究・保育研究から学び合う

A 保幼小の実践に学び合う

福井校成幼稚園・園長 大柳 世津子 氏

福井市啓蒙小学校・教諭 渡邊 淳子 氏

B 中高の実践に学び合う

福井市森田中学校・教諭 木下 慶之 氏

福井県立武生高等学校・教諭 辻崎 千尋 氏

C 特別支援教育の実践に学び合う

福井市足羽小学校・校長 小杉 真一郎 氏

Schedule

2/2 Sun	第2回大学院入試ガイダンス
2/8 Sun	第2回入学試験
2/15 Sat- 2/16 Sun	実践し省察するコミュニティ 実践研究福井ラウンドテーブル
3/1 Sat	第3回大学院入試ガイダンス
3/7 Sun	第3回入学試験
3/19 Thu	インターンシップ説明会
3/23 Mon	学位記伝達式・再出発に向けたカンファレンス
4/4 Sat	教職大学院開講式

【編集後記】2年前の福井の冬は、例年のない寒波と大雪に見舞われていましたが、今年は例年のない暖冬です。どんな冬であっても例年通りに冬期集中講座、そして長期実践報告書の執筆を経て、いよいよ今年度も長期実践報告会を迎えました。丁寧に噛まれた物語のなかから、次へ向かう道が見えてこられたのではないのでしょうか。まもなく、2月ラウンドテーブルの開催です。今回もまた、新たな出会いが多数生まれ、新たな展開の中で、また物語が綴られていくことが期待されます。

教職大学院 Newsletter **No.129**

2020.2.2 内報版発行

2020.2.10 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp